



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	苫小牧研究林の一般公開に関する現状と課題
Author(s)	杉山, 弘; 石井, 正; 小宮, 圭示 他
Citation	北方森林保全技術, 第30号, 19-24
Issue Date	2012-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73052
Type	departmental bulletin paper
File Information	2011-30_1-4.pdf



I-4 苫小牧研究林の一般公開に関する現状と課題

杉山 弘¹, 石井 正², 小宮圭示², 鷹西俊和², 奥山 悟², 及川幸雄²,
三好 等², 汲川正次², 佐藤智明², 松岡雄一², 中路達郎², 日浦 勉²

南管理部技術室¹, 苫小牧研究林²

大学研究林における公開事業とは

研究林では小学校や社会人に対し、公開講座や見学会等を行う機会が多くなってきている。この背景には 2003 年に「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」が公布され、環境教育に力を注ぐことが求められているからである。大学における環境教育は、地域貢献という形で行われている事例が多く、そのため「研究林や植物園などの緑地」が自然体験の場として再評価されつつある（鈴木ら, 2010）。北大研究林（北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション）での公開事業は、天塩研究林での「テシオコザクラの公開」、中川研究林での社会人対象の「土曜大学」、雨龍研究林での小学生対象の「森のたんけん隊」、和歌山研究林での森林ガイドを養成して小学生等を対象とした「森から学ぶ理科」などが実施例として挙げられる。

本報告では苫小牧研究林の現状と他研究機関の公開事例を紹介し、近頃増えつつあるエコ・ツアーへの対応を含め、次期長期計画策定に向け検討すべき点を提案したい。

苫小牧研究林における一般利用の状況

苫小牧研究林は 1904(明治 37)年に開設された。人口 17 万人の苫小牧市の市街地から約 3km に位置し、市民による利用が多い地域である。庁舎周辺は生態博物館（面積 31.18ha）として、樹木園・灌木園・池・ビオトープ・ビジターセンター・東屋・山草園・散策路で構成された樹木園が整備され、1983 年の整備開始以来多くの人々に親しまれている（石城, 1994）。生態博物館の中には庁舎や官舎などがある制限区域があり、周辺は森林で入林許可が必要な区域になっている（図 1）。



図 1. 生態博物館の概略図

団体による利用者数（事務所への届け出有り）は、2001～10年の10年間で延べ16,251人だった。内訳は、市内小学生の遠足や中・高校生の学校行事等が最も多く約11,162人(67%)、社会人による利用は自然観察会で約1,941人(12%)、研修・見学が約1,832人(13%)、写真撮影や絵画サークル等趣味の利用が約1,316人(8%)の合計5,089人だった（図2）。また、事務所やビジターセンターで記帳された個人利用者数は、2001～10年の10年間で約31,000人だった。団体利用と合わせると年平均約4,200人が樹木園周辺を訪れていることになる。ただし、無届けの個人利用も多く正確な数の把握はできていない。

個人利用者の内訳について、樹木園等を訪れた方を対象に2002～04年にかけて実施されたアンケート調査について紹介する。結果は81%が苫小牧市民で、「10年以上前から利用している」が過半数を占め（図3）、全体の9割がリピーターであった。滞在時間は1時間以下が50%で（図4）、利用目的は（図5）244グループから426の回答を得た結果、散歩102や自然散策や観察195となった（揚妻，2007）。

苫小牧研究林には森林資料館と森林記念館の2つの施設があり（写真1,2）、現在定期的に一般公開されている。

森林資料館は動物の剥製や樹木標本等約4,300点を展示している。従来は、施設の見学は団体に限って事前に申請してもらい実施していた。しかし、近年の環境教育に対する関心の高まりからか、市民から見学を希望する声が多くなった。そこで、2007年より4月から10月までの7ヶ月間、毎

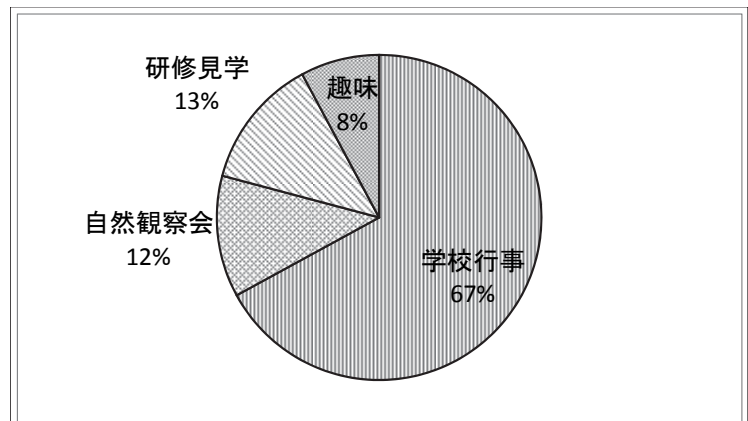


図2. 2001～10年団体利用 利用目的

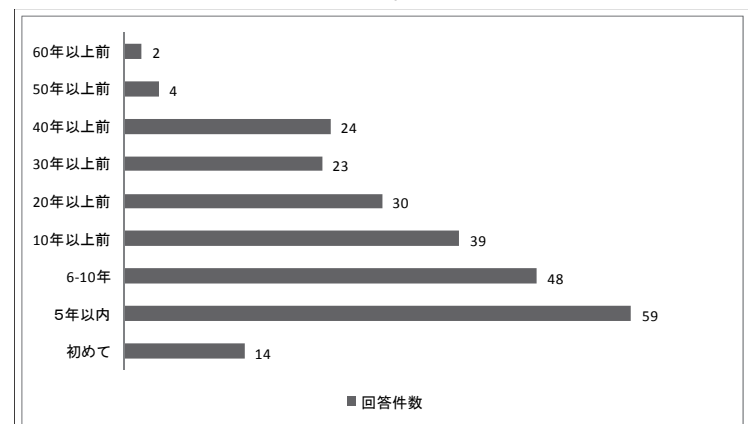


図3. 2002～04年個人利用 利用開始時期

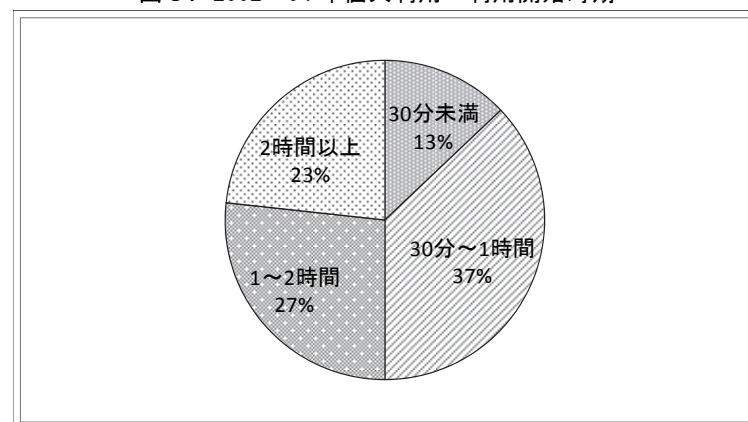


図4. 2002～04年個人利用 滞在時間

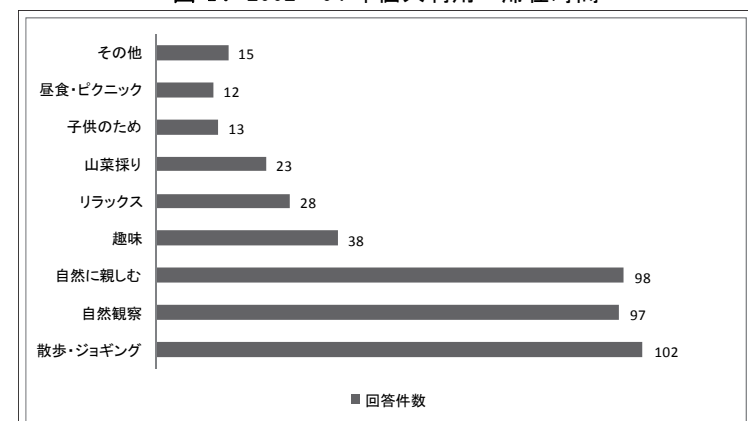


図5. 2002～04年個人利用 利用目的



写真1. 森林資料館



写真2. 森林記念館

月最終金曜日に午前9時から午後4時まで一般公開を行うことにした。公開時は職員1名を配置して、展示物の解説や来館者にアンケート調査を行っている。

アンケート調査の結果から来館者の内訳についてみると、2007～11年までの来館者数は合計1,753人であった。来館者数の推移をみると公開当初の2007年は569人、2008年は416人だったが、その後は200～300人前後と減っている（図6）。リピート率が低くなっているのは、展示内容が変わらないので目新しさがないためと考えられる。来館者の年代構成をみると60歳以上の方が全体の約51%、50歳代15.3%、40歳代13%となった（図7）。小・中学生は学校の見学会等で訪れているため、この調査では集計されていないこともあり中高年者が多い。中高年の来館が多いのは、平日の日中のみの公開であることが要因と考えられる。

森林記念館は1935（昭和10）年に建てられ、2000（平成12）年4月に国指定登録有形文化財となっている。2010年の暮れから2011年春に改修、その後展示物を整理し森林資料館と同様に一般公開を行うようにした。当初、職員数が少ないことから無人で対応する予定だったが、施設内に急勾配の螺旋階段があるため、来館者の安全を考慮して職員を配置している。お年寄りに古い馬具や農機具等が懐かしいと好評で、市民の作品を展示するギャラリーとして利用させてほしい、といった声も聞かれた。また、旧理学部の博物館改装を行っている教育学部博物館学のセミナー利用等も検討されている。

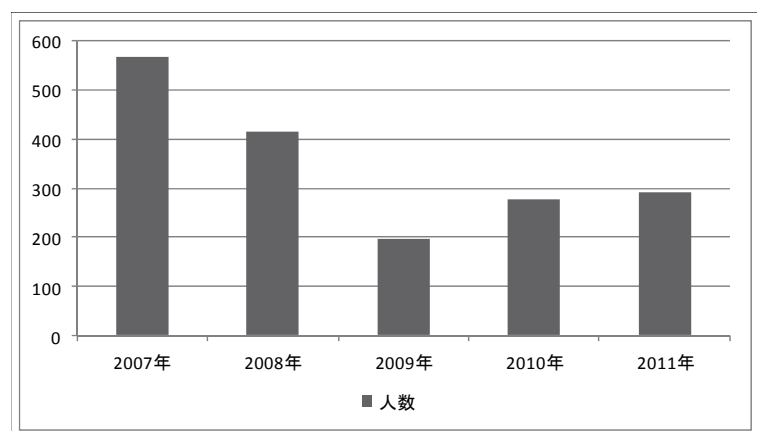


図6. 2007～11年森林資料館 来館者数の推移

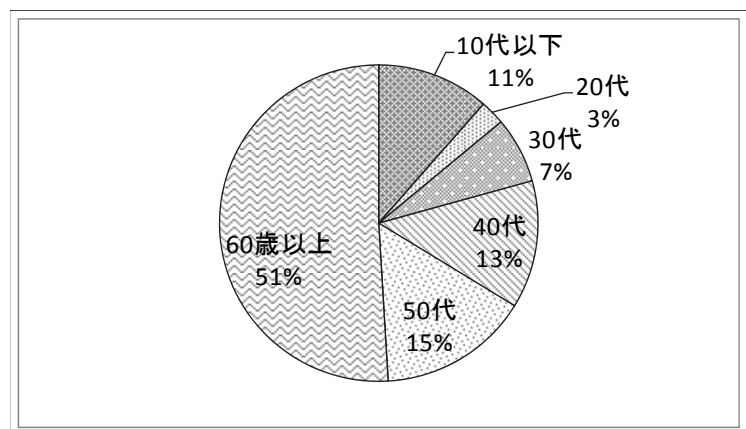


図7. 2007～11年森林資料館 来館者数の年齢構成

国内外の一般公開事例の紹介

他大学や研究機関ではどのような公開を行っているのか、文献等から収集した情報を紹介する。

筑波大学菅平高原実験センターの樹木園について紹介する。同樹木園は1955年(昭和30年)に造成が開始された。樹木園の一般公開は1975年(昭和50年)から開始され、面積は4.5haとなっている(図8)。樹木園は、見学前に事務所へ人数等を伝えることを条件に、平日午前9時から午後4時まで無料公開されている(鈴木ら, 2010)。2009年度より一般参加者を募って、回数を限定して職員の引率のもとに自然観察を行うセンターオープンデーを開催した。ちなみに、2010年度の実績はオープンデーを5回開催し、合計207名の参加があり、社会教育関連は14件、約380名が参加した。しかし、センター職員だけでは、定期的に複数回の企画を実施して一般への要望にこたえることが困難であり、マンパワー不足の解消が課題であった。このため、新たな試みとして2010年度より地域ボランティアスタッフの育成を目的に、地域住民を対象としたナチュラリスト養成講座が企画された。講座は9回開催され2010年度は22名の講座修了者を養成した。将来的には、修了者が他の講習者を養成するシステム作りの構築、講座修了者が主催する自然観察会の開催を目指している(筑波大学菅平高原実験センター, 2011)。

ただし、事故を未然に防ぐために施設の整備、事故後のトラブル回避、救急・保険制度の検討が必要とする意見もある(鈴木ら, 2010)。

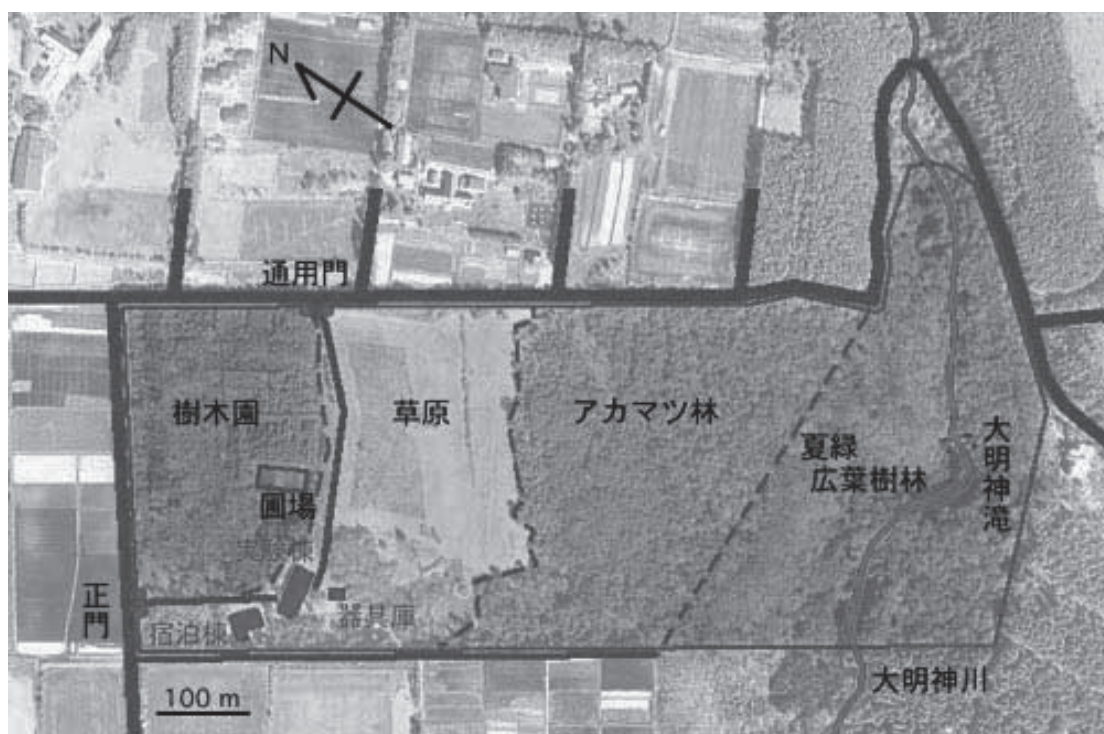


図8. 筑波大学菅平高原実験センター 概略図 筑波大学菅平高原実験センターHP より

次に国立マレーシア森林研究所 (FRIM)を紹介する。森林研究所は首都クアラルンプールから車で約30分、総面積は約400haで、AからGまで7つのエリアに分かれ、研究施設の他に学校や居住施設、見本林、自然散策路、キャンプ地、そして人気スポットのキャノピーウォークウェイがあり多くの観光客が訪れている(図9)。研究所にはエコツーリズム部門が有り、研

究者 18 名、森林の管理に携わるレンジャーが 4 名、一般事務 11 名から構成されている。ツアープログラムにおいて来訪者と直に接するガイドは、職員ではなく一般公募によって外部から募ったボランティアガイドが行っている。彼らは正規のガイドとして研究所から認証されていて、来訪者を受け入れることにより生じる業務負担が軽減される仕組みになっている。エコツアーリズム部門に所属する職員に対して意識調査した結果によると、研究所の森林の魅力について、散策路やキャンプ地などの施設が充実しているとした一方で、ツアーを運営する予算が不足していると答えていた。また、敷地が公開され、一般に利用されることへの評価について「一般市民に対し環境に関する知識を伝えることができる」、「社会貢献の機会の確保」、「研究所の収入源の一つである」と回答していた。しかし、野放図な利用を危惧する回答もあり、すべての回答者が自然環境の破壊を防ぐため、利用をコントロールすることが重要であると考えている（木下ら，2011）。

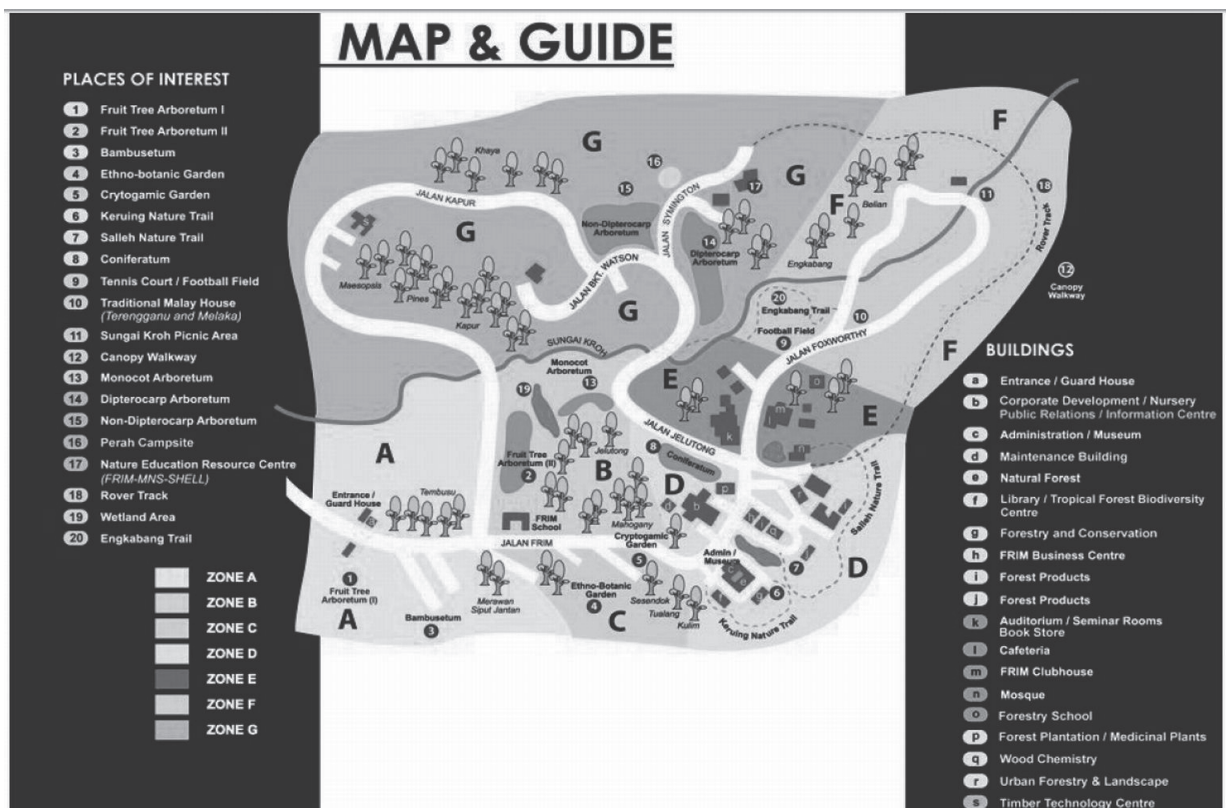


図 9．国立マレーシア森林研究所（FRIM）地図（木下ら，2011）

苦小牧研究林における公開の問題点

苦小牧研究林では大学の研究・教育以外に、小学校等学校や一般市民の利用が多いことが特徴である。しかし中には、営利目的なのか社会教育の一環なのか線引きが難しい民間企業によるエコ・ツアーの申し込みがある。民間企業のエコ・ツアーの受け入れについて、森林圏では各林でその都度対処することになっていた。

苦小牧研究林では、民間企業の有料ツアーは照会があった時点で断っている。ところが、近年のエコ・ツアー人気の高まりにより、無許可で「研究林の森散策ツアー」等が開催されるようになってきた。また、勝手にツアー企画がインターネットのサイトにアップされている事例や、北大教員の名で申し込みされたが実態は営利目的のツアーであった、職員不在の土日や祝祭日に無届けで来ているなどのケースもある。

このような問題は他の研究林にもあり、天塩研究林ではテシオコザクラの公開事業の際、無許可の民間ツアーが入ってトラブルになった事例が紹介された（伊藤欣也，2010）。

こうした状況が起こるのは、入林に際して申請が必要なことが周知されていない、つまり苦小牧研究林および森林圏ステーションの情報発信不足もひとつの原因であると推察される。そこで苦小牧研究林では、現在断っている民間企業によるエコ・ツアーについて、積極的に受け入れることにより一般市民に対し環境に関する情報の発信ができると考え、受入を前提にメリットおよびデメリットを検討してみた。伐採収入に代わる新たな収入源として、大型観光バスの駐車料金徴収やエコ・ツアー等営利団体から利用料金を徴収することなどが考えられる。また、和歌山研究林のようにグッズ、例えば研究林の木材を利用して木工品を販売することも考えられる。ただし、駐車場整備やトイレ増設等の環境整備をする必要があるほか、料金徴収方法および管理、見学者の安全管理等クリアしなければならない問題が多い。

休日や祝祭日のツアーに対応する職員の負担を減らすため、市民ボランティアを募ってみてはどうかという意見も出た。しかし、ボランティア任せにすると誤った利用や情報発信等、研究林サイドで管理できなくなる恐れもあるため、ボランティア運営は研究林が主体となることが重要と考える。また、利用が増えることによる森林環境へのインパクトや、誤って実験区域へ立ち入るリスクも危惧される。いずれにしても、正しい公開方法について検討を進めていく必要があるだろう。

次期長期計画策定に向けて

大学が環境教育を通じた地域貢献を求められていることは、今後も変わらないどころか増えていくものと予想される。特に苦小牧研究林は苦小牧市内に隣接する自然豊かな森として注目され、近隣市町村からも期待が大きい。

次期長期計画を策定する時期にきている。研究林ごとに事情は異なるが、研究林の森から収入を得ることについて木材生産以外の価値を見いだすべきではないだろうか。そのきっかけとして、エコ・ツアーの受入れを検討してみてもどうだろう。各研究林で独自に対応しているエコ・ツアーの受け入れを含めた公開方法を整理するとともに、利用マニュアルの作成や料金徴収方法など各研究林だけでは決めることが出来ない事項について、規約等の整備を含めて森林圏ステーション全体で検討すべきであると考えられる。

参考文献

- 1) 鈴木亨ほか，2010，大学緑地の公開に向けた課題－菅平高原実験センター樹木園の事例－，観光科学研究 第3号，1-8.
- 2) 石城謙吉，1994，森はよみがえる，講談社，241pp.
- 3) 揚妻-柳原芳美，2007，北海道大学苦小牧研究林の市民による利用形態，北海道大学演習林研究報告 第64巻第1号，1-21.
- 4) 筑波大学菅平高原実験センター，2011，筑波大学菅平高原実験センター2010 年度（平成22年）年次報告書，19pp
- 5) 木下万里ほか，2011，自然資源を有する研究機関の一般公開に関する一考察，首都大学東京リポジトリみやこ鳥 第4号，83-87.
- 6) 伊藤欣也，2010，テシオコザクラの公開，北方森林保全技術 第28号，1-7.